

「川といきる」「村をひらく」「農をおこす」

——岩見沢市北村発『北村の記憶』から見えてくる北海道

第3回 「農をおこす」

ノンフィクションライター、「ほっかいどう学 新聞」編集人

北室 かず子 (きたむろ かずこ)

1962年徳島県出身。筑波大学比較文化学類卒業後、婦人画報社（現・ハースト婦人画報社）に入社し、女性月刊誌の編集に携わる。91年からJR北海道車内広報誌『THE JR Hokkaido』特集を30年にわたり企画・取材・執筆中。著書：『赤れんが庁舎物語』（北海道文化財保護協会）、『北の鞆ものがたり—いたがきの職人魂』（北海道新聞社）など。

手掘り溝で水を抜く

当連載は、岩見沢市北村地域農泊推進協議会が村田文江氏（元北海道教育大学教授、岩見沢市文化財保護委員会委員）の監修で発行した『北村の記憶』から、北村開発史を知るとともに、ほっかいどう学のエレメントを探ろうというものです。第1回、第2回で、石狩川の治水によって開発の基礎ができたこと、開拓リーダーの北村3兄弟が農業安定経営と時代に先駆けた六次産業化に取り組んだことなどをご紹介します。第3回の「農をおこす」では、北村でどのように生産基盤が整えられていき、現在はどんな取り組みが行われているのかをご紹介します。

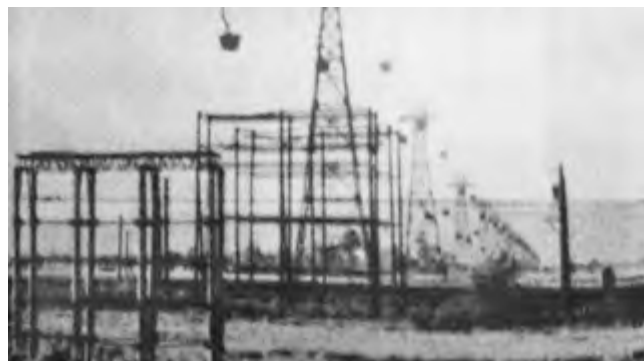
石狩川河畔の低地である北村は、全面積の77%もが泥炭地。明治時代に、北海道庁が開墾予定地を選んで区画を行った際、北村は泥炭地ゆえ、その対象から外されていました。泥炭地は無機成分が乏しく、スポンジのように水分を含んだ軟弱地盤です。植物の繊維が絡み合っているため馬1頭ではとても耕せず、2頭引きでようやくできたとか、田の代掻きでは、馬の脚がずぶずぶと沈んでいくので、泥炭用蹄鉄を施したという記録も北村にはあります。



開拓期から昭和40年代まで行われていた馬搬客土。『曠野に立ちて 北村土地改良史』（北村発行）より。

この泥炭地を前に人々はまず、排水路となる溝を掘って土中から水を抜き、地下水位を下げました。重機のない時代、その多くは手掘りでした。これは北村に限ったことではなく、泥炭地が広がる北海道における農地開発に共通しています。掘った溝が地表に見えているのが明渠、排水管などが土中に埋められているのが暗渠です。私たちは緑の田園景観を見ると自然豊かな風景と思いがちですが、実は地下には排水のための暗渠が張り巡らされています。つまり“自然”ではなく、きわめて人工的な、人の手が作り上げたものだということがわかります。

排水の次は、客土です。1947（昭和22）年から始まった客土事業では、山などの土を泥炭地に入れ、農作物が育つ土質への改良が行われました。膨大な量の土が、さまざまな方法で運搬されました。馬が運ぶ馬搬客土、軌道（レール）を敷いてトロッコで運ぶ軌道客土、索道によって空中を運ぶ索道客土、台箱を載せたバチ櫃そりをブルドーザで牽引して運ぶバチ客土、水を加えて泥状にしてパイプで送る送泥客土、トラックで運ぶトラック客土などなど。客土事業によって土質は飛躍的に向上しました。客土前は黒っぽかった稲が、客土を施した田では黄金色に変わったそうです。



スキー場のリフトのような索道客土。『曠野に立ちて 北村土地改良史』（北村発行）より。

土一粒にも先人の汗が

こうしてできた土地で稲作を行うためには灌漑かんがいが必要です。お茶碗一杯のご飯に相当する米を栽培するのに必要な水の量は、なんと、2ℓペットボトルで約100本分！大量の水を賄うには、川から水を取り入れる頭首工や用水路など、水を司るための大規模な設備が欠かせません。1922（大正11）年に設立された北海土功組合（現・北海土地改良区）が、空知川からの水を導く幹線水路「北海灌漑溝（現・北海幹線用水路）」を1929（昭和4）年に完成させます。赤平市で取水し、砂川市、奈井江町、美唄市、三笠市、岩見沢市、栗沢町、南幌町まで約80kmで、農業専用の用水路としては日本最長です。土功組合とは、明治時代、政府が米の増産と移住者定着のために制定した「北海道土功組合法」によってできたもので、ここにも北海道独自の歴史が見てとれます。なお、幹線から離れた北村は、1928（昭和3）年、北村揚水機場を建設して石狩川の水を揚水し、灌漑を行いました。

その後、昭和40年代に「米離れ」が顕著になる中、効率化のため、大型農業機械を使いやすくする圃場整備ほじょうが進められました。水田区画を大型化し、用水と排水を分離し、農道も整備する、総合的な大事業です。道営圃場整備事業は、1966（昭和41）年に着工し、1988（昭和63）年に村内全域の工事を終えました。

排水して客土し、灌漑を行う。気の遠くなるほどの苦労を重ねて、泥炭地は農地に変貌しました。北村の農業史を振り返ることで、農地とは、一粒の土にさえも人の汗が浸み込んでいることがわかります。



豊かな実りの大地となった北村の今。国土交通省北海道開発局札幌開発建設部提供。

スマート農業の先進地に

こうして作り上げられた農業基盤の上で、今展開しているのが、世界トップレベルのスマート農業です。2013（平成25）年に、いわみざわ地域ICT農業利活用研究会が立ち上げられ、岩見沢市、北海道大学、JAで産官学の連携ができました。農業ロボット研究で世界をリードする北海道大学教授の野口伸さんの知見のもとに、GPS機器・自動操舵を搭載した無人トラクターが北村の農地で働いています。また、水田の給水・排水をスマートフォンやパソコンでモニタリングしながら、遠隔操作や自動制御ができるシステムも実働しています。農家は水廻りをしなくてすむようになり、作業時間の軽減が図れています。データ収集とその活用も進み、岩見沢市内13カ所に気象観測機器が設置され50mメッシュで降水量や気温がわかる気象情報サービスが提供されています。さらに、Web上の地図に自分の圃場位置と作物情報を登録すると、小麦ならば生育具合と収量の予測、水稲では病害虫発生予測、乾田直播のための地表面温度や土壌水分量情報などがわかります。これらは就農人口の減少と高齢化という、農村の課題に対応するものです。ということは、北村で研究、実装された技術が、超高齢・人口減少社会となった日本の農業を救うともいえます。

明治時代、開墾の候補地にさえならなかった泥炭地が、人々の不断の努力で実り豊かな農地となり、最先端の技術研究が行われ、それが実装される地となったのです。

旅行商品開発に乗り出す

そんな北村の農業を知ってほしい、北村のファンを増やしたいと、北村地域農泊推進協議会では、北村に滞在して農業・農村を体験するプログラムづくりを進めています。2020（令和2）年度から北村地域農泊モニターツアーを開始。同年8月、札幌の大学生を招いて北村で行われている野菜栽培を学び、枝豆、バジル、トマト、人参、とうきび、ナス等の収穫体験をして多彩な北村農業の醍醐味を感じてもらいました。画期的なのはアウトドアのアクティビティも始めたことで

す。北村遊水地内でキャンプをしながら、雁里沼^{かりさと}でカヌーを体験してもらいました。雁里沼は日本一の大きさの三日月湖だそうで、石狩川の蛇行のスケール感を知るにも最適です。2022（令和4）年2月には、札幌と岩見沢市内から20代～30代の21人が1泊2日で冬のモニターツアーに参加しました。広大な北村遊水地をスノーシューで歩きながらキタキツネの足跡を探したり、凍結した雁里沼ではスノーモービルでバナナボート^{バナナボート}を引っ張るスリリングなアクティビティに大興奮したり。定番のワカサギ釣りも行い、冷えた体をレンタルしておいたテントサウナで“整え”て、地域にお店があるタイ式フットマッサージもプログラムに取り入れられました。

運営にあたった仲間は北村の農家18人。20代から30代が多く、若い活力にあふれています。そのリーダーで、北村地域農泊推進協議会プロジェクトマネージャーを務める北村慶如^{やすゆき}さんはこう語ります。「スノーシュー体験は岩見沢市内のアウトドアのガイドさんと連携して生まれたアクティビティです。自分らの畑とは思えず、すごく新鮮でした。納屋で食べる北村産米のおにぎり^{おにぎり}と豚汁の昼食も喜んでもらえました。スノーモービルもワカサギ釣りも、自分たちが普段使っているものを持ち寄ってやってみたんです。魅力は一つじゃなくつながる方がいい。いろいろなことをやってみて参加者の感想をもとにブラッシュアップしていこうと思っています」。ワカサギ釣りの道具が遊び道具なのはわかるとしてもスノーモービルをどう調達したのかうかがうと「圃場に融雪剤を撒くために持っている人が多いんです」と、北村さん。ちなみに北村さんが「納屋」と言う昼食会場も体育館のような立派な建物であることを付け加えておきます。このように、もともと地域にあり、北村ならではの農業を感じられるもの。それこそが独自性のある観光資源なのでしょう。



北村遊水地にある真冬の畑をスノーシューで探索する。農家の人たちも自身の畑が別世界に見えたそうだ。



「えん農フェス 北海道の農と食を感じる旅」で北村牧場の碑を訪ねる参加者と案内する小西さん（右端）。

一方、小西ファームの小西泰子さんは、6月に熊本県立農業大学校の見学旅行を受け入れました。旅行代理店と直接やりとりして組み立てた2時間の農業体験です。北村の基盤整備と農泊事業について話をし、収穫体験と、農業六次化については北村産落花生とバジルで作ったバジルソースの試食などを行いました。今夏はさらに「えん農フェス 北海道の農と食を感じる旅」も受け入れました。全国から集まった農業に対する意識の高い人々に北村開拓の歴史スポットも案内。歴史のさまざまな局面をコンパクトにまとめた『北村の記憶』を活用したそうです。

北村中学校の生徒さんたちも地域社会の一員として奮闘しています。水田脇の農業用排水路には、古くからドジョウが多く生息していたのですが、このドジョウの捕獲体験を旅行商品にしようというのです。今秋のモニターツアーでは生徒さんが観光客にドジョウの捕獲方法を指導する先生役を務めます。生徒さんは、北村泥鰌^{どじょう}養殖保護育成組合から、ドジョウの生態と「どう」という道具を使って行う捕獲方法についての指南を受け、着々と準備を進めています。

北村中学校の実行力は折り紙つきで、既に北村産米粉のクッキー「北村クッキー」を商品化し、北村温泉



北村中学の生徒さんたちが開発した「北村クッキー」。

ホテルなどで販売しています。サクサクでほっこりした米粉の食感と、かぼちゃ、じゃがいも、きなこを生地練り込んだバリエーション豊かなフレーバーに魅了され、筆者は北村を訪れるたび何袋も大人買いしていることを告白しておきます。

地元にはいっぱいあった“売り物”

今夏はさらに、北村の農家のお母さんの味が、北村温泉ホテルのレストラン「四季彩」で味わえるようになりました。それが「わっぱめし」です。東京や札幌のホテルで20年以上の経験のある後藤茂雄料理長が、北村の手作り味噌や野菜のつくだ煮など、おいしい郷土料理とのコラボを考えたことが発端です。「わっぱめし」の実現に奔走した小西泰子さんはこう振り返ります。「料理長から話があった時、仲間たちは『レストランにうちのおかずを出す？そんなのありえないしょ』って、誰も真に



北村の農家のお母さんと北村温泉ホテルの料理長のコラボ、「わっぱめし」。

受けなかったくらい。料理長の料理と自分のお惣菜と一緒に並ぶなんて、今でも信じられないです」。お母さんたちが心を込めて調理し、保存法にも工夫を凝らした逸品です。

北村には本当に多様な“売り物”があることがわかります。それを農泊以前に意識したことがあったかうかがうと、「なかったです、全然」という言葉が、皆さんの口から異口同音に聞こえてきました。

札幌のある大学生は、農泊事業への参加がきっかけで岩見沢に愛着を抱き、岩見沢市の地域おこし協力隊員となりました。さらにこの人のお父さんは関東地方で食品加工の会社を経営しており、北村の農産物加工の可能性を探っているそうです。「こんなつながりが生まれるとは思ってもみませんでした。農泊事業で関係



1896（明治29）年の「北海道地形図」。

人口が増えていっているのを感じます。外部からの声は地元の自信にもなります。観光地みたいに見て帰るだけではなく、北村のファンになっていただけるよう、おもてなししたい」と、北村さんは語ってくれました。

農村風景が観光資源になる。それは富良野や美瑛を考えると既に当たり前のことですが、地元農家が案内役となって、雪原と化した畑をスノーシューで探索したり、三日月湖でカヌーをしたりといった経験はなかなかできません。訪問者は、農村風景をいわゆる絶景の一つとして消費するのではなく、農業の生産空間がどのように作られ、どんな人々によって、どう維持されているかを理解します。食料とは命そのもの。その成り立ちを知ることは、安心安全な食を求める日々の消費行動にも、農村基盤整備への理解にもつながることでしょう。

連載第1回に掲載した1896年の「北海道地形図」（写真上）をもう一度、ご覧ください。平地にもかかわらず、泥炭地ゆえ開墾適地から外され、北村の場所がぼっかり空いていることがわかります。その北村が、石狩川の水害を克服し、排水、客土、灌漑、区画整理、土地改良という基盤整備によって豊かな農村となりました。そこには唯一無二の歴史があります。と、同時に、北海道開発全体に通じる共通点もあります。地域の物語を丹念に掘り起こすとともに、普遍性を抽出していくこと。それは「ほっかいどう学」における学びのヒントにもなるのではないのでしょうか。